
ArmordCore 三つの問い~ザ・スリー・クエスチョンズ~

石田 昌行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ArmordCore 三つの問い〜ザ・スリー・クエスチョンズ〜

【Nコード】

N5396Z

【作者名】

石田 昌行

【あらすじ】

はるかな未来。

「大破壊」と呼ばれる未曾有の災害に遭遇し、母なる大地を捨て地下へと逃れた人類。

人々は自らが作り上げた「管理者」と呼ばれる人工知能にすべてを委ね、偽りの楽園で生まれ、育ち、そして死んでいった。

ありとあらゆるもの他者からの管理が当然とされる空のない閉ざされた世界。

しかしその中で唯一、何者にも束縛されることなくただ己の意志のみによつてさまざまに任務をこなしていく傭兵たちがいた。

そして人々は彼らを「レイヴン」と呼び、その乗機となる機動兵器をAC アーマードコアと呼んだ。

フロムソフトウェアの傑作ゲーム「アーマードコア」シリーズをベースに独自に再構成した二次創作です。

おおもとの物語は「アーマードコア3」

しかし、大幅に設定の変更を行っておりますので、その点を気にされる方は読まない方がいいかもしれません。

序章

今をさかのぼること数百年の昔　後に「大破壊」^{カタストロフ}と呼ばれる惑星規模の災害が発生した。

地上は汚染され、生き残ったわずかな人々は、安息の地を求めて日の光の届かぬ地下へと逃れて行った。

人類の新たな旅立ち　しかしその前途は決して明るいものではなかった。

この崩壊した世界を復興する為の新たな旗手　それは「管理者」^{DOVE}と呼ばれる人工知能だった。

「管理者」は大規模な地下都市計画を押し進め、その庇護の下で人類は、ふたたび生きる気力を取り戻していく。

この時大きな役割を担ったのが、いわゆるMT^{マツストレーサー}と呼ばれるものであった。

生身の人間では対処出来ない危険な作業を遂行するための、四肢を持つ大型機械。

MTの開発は年々進み、やがて高出力のジェネレーターを内蔵した基幹部分^{コア}を中心として各部位をパーツ化し、状況に応じてそれらを組み替えることにより汎用性を備えたCS^{コアシステム}へと発展する。

理想の世界を目指してふたたび立ち上がった人類　しかし、その愚かさだけは変えようがなかった。

破滅した「国家」^{ネーション}に代わり台頭してきた力持つ者、すなわち「企業」^{コーポレーション}が利権を巡って激しく対立していったのだ。

輝かしい希望は打ち砕かれ、いつしか人々は「管理者」にすべてを委ねること日々の平穏を甘受するようになっていた。

すべてが管理される「レイヤード」と呼ばれる地下世界　そこは今暗黒への道を歩み始めようとしていた。

都市区画の老朽化は貧民街^{スラム}を増大させ、犯罪率は激増の一途を辿る。

混乱する社会を省みずただ自社の利益のみを追求し続ける企業に対し、それに反発する勢力が組織集団暴力テロリズムという名の破壊行為に訴えようとするのは、あるいは必然であったのかもしれない。

そんな中、かつて企業が管理していた警察組織は傭兵部隊レイヴンへと変貌を遂げていた。

報酬次第で体制側にも反体制側にも着くという不安定な第三勢力。管理されることが当然とされるこの世界で唯一何者にも拘束されず、武装化されたMTを主体にさまざまな行動を起こす傭兵たち。

ある時は犯罪組織を殲滅する正義の使者となり

そしてまたある時は理不尽極まりない破壊の使徒となる

そんな彼らの乗機を、人々はAC アーマードコアと呼んだ。

インベージョン

『敵部隊接近。これは演習ではない。作業員は速やかに待避せよ』
狂ったようにながりに立てるスピーカーを尻目に、トルーパーは耐
圧服のジッパーを胸元まで一気に引き上げた。

性別は男性。

外見から見て取れる年齢は四十の半ば程度であろうか。
それほどの大男ではない。

むしろ、平均的な体躯と言える。

しかし、耐圧服に包まれた肉体は十分に鍛えあげられ、顔面
に刻まれつつある老いの兆しを頑なに拒み続けているかのようだ。
遠雷のように複数の爆発音が待機室の空気を微動させた。

長距離砲による戦略砲撃か。

いや、状況からすると施設攻撃用の大型誘導弾を用いたものだ
ろう。

おそらくは支援攻撃。

混乱に乗じ、実働部隊が侵攻してくると見てまず間違いあるま
い。

警備部隊の連中は、今頃“蜂の巣を突いたような”騒ぎに巻き込
まれているのだろうか。

古強者^{ベテラン}らしく、落ち着いた態度を崩さずに出撃準備を整えていく
トルーパーは、まるで他人ごとのような感想を思い浮かべた。

蜂の巣を突いたような 意味のある言葉としては現存している
が、地下世界レイヤードの住人には“蜂”^{ホーネット}という昆虫の一種がどの
ような生命体であったのかを実体験で知る者はひとりとしていない。
それはもはや、電子記録媒体の中に存在する単なる情報^{データ}のひと
つへと成り果ててしまっていたからだ。

「状況はどうなっている？」

壁面に設けられている内線電話^{インターコム}を操作し、トルーパーは司令室へ

と通信を入れた。

彼からの通信は基地指令へ直通される。

指揮系統としては異例の待遇だ。

彼は“傭兵”^{レイヴン}だった。

それも、実績に拠る階級^{ランキンゲ}で上位に記録される“ランカー”と呼ばれる実力者だ。

当然、“軽騎兵”^{トルーパー}という名も本名ではない。

だが、今の彼にとって真に価値を持つのは戸籍上に記載された市民^{リアン}としての名称ではなく、その力量をもって知られるようになった異名の方であることもまた事実であった。

トルーパーはこの基地を統括管理する企業から依頼され、数日前から愛機と共に同地へ駐屯している。

ただし、基地警備部隊へと配属された訳ではない。

あくまでも、独立した一個の戦闘単位としてである。

従って、基地指令といえども彼に直接命令を下すことは出来なかった。

それどころか、非常時には可能な限りの努力をもって彼の行動を支援するよう上層部から厳命されてすらいた。

レイヴン、それもランカーと称される者の価値は基地警備部隊の総力をも上回る。

基地指令がその事実を納得して受け入れたかどうかは定かでない。しかし、少なくとも立場上、理解しているのだけは確かだった。

『レイヴン、聞いてのとおりだ。おそらく、対抗企業の差し金だろう。敵部隊を迎撃してくれ』

淡々と基地指令は言った。

『済まないが、こちら側の機体はほとんどが配備されたばかりで調整中だ。出せるだけの戦力は投入するが、余り期待はしないで欲しい』

「了解した」

短く返答したトルーパーは、部屋から出る直前、胸ポケットから

一枚の写真を取り出し、感慨深げな眼差しをそれに落とす。

ひとり娘の写真だった。

父親らしいことはほとんど何もしてやれなかった愛娘。

彼が彼女に向けた愛情は天地神明に賭けても偽りのない本物であったが、娘の方はそう受け取りはしてくれなかった。

家族にも秘密にしていたレイヴンという己の業。

病弱だった妻の死に目に同席出来なかった時、まだ年若い娘は彼の愛情を完全に否定した。

肉親よりも仕事の方を優先した父親。

叩き付けるように素の感情を爆発させた娘は、今彼の帰るべき我が家にはいない。

今頃どこで何をしているのだろうか。

願わくば、自分自身の幸せを追っていて欲しい。

いや、せめて生きてさえいてくれれば。

個人的な感傷は、しかし、数秒で完了した。

今の彼は、娘を持つ市井の父親ではない。

足早に地下格納庫へと向かう彼の脇を、基地整備隊を束ねる班長が寄り添うように同行する。

彼はトルーパーと短く言葉を交わしながら、板に挟んだ点検記録紙シートに記された確認項目をひとつひとつ埋めていく。

人類がいつの時代から“紙”ペーパーというものを使用しているのかは定かでないが、いまだそれに代わりうる決定的な存在は世に生み出されてはいない。

大きな体育館を更にふた回りは拡大したような格納庫。

本来ならば多くの物資や作業機械などが収められているその場を臨時に使用して、アーマード・コア「ヴァイパー」は駐機されていた。

アーマード・コア。略してAC このレイヤードと呼ばれる地下世界において比類ない実力を持つ戦闘単位、かつ企業が所有する戦闘用MTなど足下にもおよばぬ、圧倒的な性能を秘めた最強の機

動兵器だ。

全高は一〇数m。

主力戦闘車両MBTのそれをはるかに凌駕する対弾性能を有した特殊複合装甲で身を固め、人間と同様、左右の腕部を用いての多彩な兵装運用能力は対地・対空を問わず敵と戦場とを選びはしない。

加えて、強力な内装推進器スラスターを統合制御することによってACに与えられた三次元機動性能は、高々度という概念の存在しえない地下世界において、それらが所有する能力の白眉とさえ言えた。

「ヴァイパー」の操縦席コックピットへその身を沈めたトルーパーは、待機状態にあつた愛機のミッションコンピュータを戦闘モードへと切り替えた。

機体中枢 胴体部分の奥深く、人体がぎりぎり収まるだけの容量しか持たない密閉された操縦席の中で、それまで沈黙を保っていた計器が目覚める。

トルーパーの顔面を覆うヘルメットのバイザーに数々の機体情報レイダーが投影された。

アーマード・コア「ヴァイパー」は、機動襲撃を基本任務として組みあげられた機体だ。

オフエンス・ディフェンスモビリティ
火力・装甲・機動力といった戦闘実力を測る三要素のうち、火力と機動力とを重視した性能を有している。

主兵装は右腕部マニピュレーターが携行する二七mm機関砲だ。マシンガン

単発の打撃力こそ戦闘用車両の主砲に劣るものの、断続的に発射される二七mm焼夷徹甲弾APIの投射弾量は、MBTを除く装甲車両であれば正面からでも十分以上に撃破可能。

例えMBTを相手にした場合であっても、装甲の貧弱な上面部分をトップアタック出来るACにとってはほぼ問題にならない。

高い発射速度によってもたらされる制圧効果も非装甲目標に対しては強力だ。

そして、左腕部が携行する二五mm機関砲がそれを補助する。

二五mm機関砲は右腕部の保持する二七mm機関砲と比べて貫通

力と総弾数の両面において劣るが良好な発射速度を持ち、補助武器として考えると必要十分な性能だとも言える。

加えて、胴体後部には目標を自動的に探知して攻撃を行う自律攻撃装置　イクシード・オービットが二基内装されている。

「ヴァイパー」に搭載されているそれは、同種の火器としては大口径の部類に入る四〇mm機関砲だ。

両腕からの同時射撃および自律攻撃装置の展開によって「ヴァイパー」が発揮出来る火力は、陸戦兵器として尋常のレベルにはなかった。

だが、ACのように重厚な対弾防御を持った目標に対しては、特に中距離以遠に於いてどの兵装も十分な瞬間火力を得られないであろうこともトルーパーにはわかっていた。

総合的な火力は十分でも、短時間で目標を沈黙させられないという事実は機動襲撃任務にとって重大な問題と言える。

だから、「ヴァイパー」の背部左側ターレットポイントには打撃兵装として強力な粒子加速砲が搭載されていた。

粒子加速砲は、電気を帯びた重金属粒子に磁力を掛け、これを収束・加速して目標へ投射する非実体弾兵器の一種だ。

放たれた重金属粒子はレーザーのような光学兵器と異なり、それ自体が微少とはいえ質量を持つために運動エネルギーによる貫通と熱エネルギーによる破壊とを同時にもたらすのだ。

理論的には初期の非実体弾兵器ではあるが、そうした攻撃を視野に入れて設計された特殊複合装甲でない限り、これに真っ向から対抗することは困難だった。

もちろん今やACが標準装備する最新型の防御装甲

ナノマシン
NM型特
コンバット・ブローブ

殊複合装甲に対しても深刻な打撃を与えうることは過去の戦闘実績からも立証されている。

膨大な電力を生み出す小型融合炉が本格的に起動し、「ヴァイパー」は四肢を軋ませながら立ち上がった。

いや四肢と言うには語弊がある。

「ヴァイパー」の下半身は人間のような二本の脚部を備えた型ではなく、甲殻類にも似た四本の脚部を有した型となっているからであつた。

四本の脚部を持った下半身は、攻撃時に安定したプラットフォームとしての機能をACに与える。

攻撃力と機動力を重視するトルーパーの好みに最も合致した脚部であつた。

複数の火器を携えた上半身を四本の脚部で支えているという「ヴァイパー」の外観は、搭乗者が持つ名前のおり俊敏さを売りにした軽騎兵^{トルーパー}を連想させる。

「あれは何だ」

整備員たちが一斉に上空の一角に目を向けたのはその時だった。

大型の巡航ミサイルを思わせる飛翔体が基地上空に飛来したのだ。

だが、それは敷地内に落下する軌跡を描くことなく上空で飛散し、弾体とは異なる“何か”を地表目掛けて送り込んだ。

それが落下したと思われる方向から地響きが轟いてきた。

トルーパーは軽く舌打ちした。

あれはVOB^{ヴァンガード・オーバード・ブースト} 機動兵器を目標付近へ迅速に運搬するために使用される長距離侵攻用大型ロケットブースターだ。

大型ゆえに高価、そして基本的には使い捨てとなるVOBをあえて使用してまで投入が図られる機動兵器は、AC以外には考えられない。

突如として飛来してきた“巨人”の姿に、兵士たちは取るものも取らず逃げ惑つた。

推進器^{スラスタ}が発生させる膨大な推力でも減衰し切れないだけの慣性を有したまま、それは地表の瓦礫を蹴散らしつつ滑り込むように地表へと降り立った。

白と青で塗装された身長一〇数mの巨人^{ギガント}は、伝説上にしか存在しない魔物を思わせる単眼を赤く輝かせゆつくりと上体を起こす。

標準的な人間と比較すると不自然なまでに太く重々しい両脚が、衝撃で横転した車両を無造作に踏み潰した。

巨人はその場で腰を落とし、左側背部に折り畳んで搭載している大型の兵装を肩に担ぐようにして目標へと向けた。

それが目標としているのは、この基地内に備蓄された膨大な量の弾薬であった。

弾薬はこの基地を管理する企業が周辺に展開する主力部隊のために集積したもので、強固に防御された半地下倉庫に集中保管されていた。

厚さ数mに及ぶコンクリートに覆われたその場所は、並大抵の航空攻撃では破壊が不可能と判断されている。

巨人の目的を知ってか知らずか、無数の火線が巨人に伸びた。

だが、生身の兵士たちが携行する兵器の火力ごときではACの全身を覆うNM型特殊複合装甲を貫くことなど出来はしない。

巨人は、兵士たちの狂宴を尻目に兵装から光弾を放った。

高出力プラズマビーム砲であった。

電磁誘導を利用し、プラズマ化した金属粒子を弾体として目標へ投射する兵器　弾体の形成と加速に膨大な電力を使用する反面、高出力のエネルギー源さえ確保出来れば同規模の通常火器と比較してはるかに高い威力を発揮する兵器システムだ。

巨人が使用したプラズマビーム砲も重野砲並のサイズと発射回数
の減少　弾体である超高温プラズマの生成を核融合ペレットを使用したレーザー爆縮に頼っていることで制限を受ける　を許容する代償として、大型艦船の主砲クラスに匹敵する絶大な破壊力を獲得していた。

長大な砲身に見立てた三本の電磁誘導棒が周囲から掻き集めたかのようにその基部へと熱量を伴う青白い光が集中し、やがて臨界点に達したそれは一気に空中へと放たれる。

数万度の熱を帯びたプラズマの塊は、周辺に存在する大気によってそのエネルギーを減衰されながらも想像を絶する熱量を維持した

まま弾薬庫搬入口付近に着弾した。

基地弾薬庫は主に航空機による攻撃を想定して設計されていたため、水平状態に近い射点からの直接砲撃に対しては比較的脆弱であった。

とはいえ、その防御力は口径一五〇mm級の野戦重砲を直撃させてなおこれに悠然と耐えうるほどのものであり、設計した側としては弱点とまでは考えていなかった。

だが、今それに襲い掛かった超高温のプラズマ粒子は、距離二〇〇mにおいて特殊鋼換算一五〇〇mm以上の貫徹能力を発揮する。いかに重厚な対弾設計を施してあったとはいえ、その熱量による破壊を前にしては物理的な衝撃防御はまったくの無力であったと言っている。

分厚いコンクリート壁を易々と打ち破って弾薬庫内部に突入した灼熱の奔流は備蓄されていた弾薬に化学反応を引き起こさせ、その爆発によって発生した高エネルギーが連鎖的に他の弾薬の誘爆を引き起こした。

地表の至る所から火柱が吹き上がった。

凄まじい熱風が地表付近を薙ぎ払い、兵士たちは生きたまま松明のごとくその肉体を燃えあがらせた。

迎撃のために発進しようとしていた複数の戦闘用回転翼機も周囲の建造物へと勢いよく叩き付けられ、搭乗者共々無惨な残骸へと成り果てた。

巨人は、自らが引き起こした凄絶な破壊を目の当たりにしながらも平然と膝を伸ばし、担いでいたプラズマビーム砲を背部へと収納する。

周囲に生き残った兵士がいたかどうかはわからない。

ただし、仮にいたとしても巨人がその生死に興味を示すことはなかったであろう。

「ヴァイパー」が戦場へ到着したのは、まさにその瞬間であった。一足遅かった。

トルーパーは、敵機の向こうに広がる惨状を前に齒軋りする。敵は目的を果たし、自分はそれを阻止し得なかった。それは認めよう。

だが、生かしては歸さぬ。

白いACの探知範囲外縁を舐めるように滑り込んで来た「ヴァイパー」が、左肩上に担ぐような形で展開した粒子加速砲を照準した。砲口部分に白熱した光の塊が発生し大気を焼く。

狙いはまだ甘いがトルーパーはためらうことなく引き金を引いた。直後、指向性を持った光の帯が目標に向かって放たれた。

周囲の空間を突き破り、まっしぐらに目標へ向かったそれは「ヴァイパー」の存在を探知し振り返った巨人の右腕部に着弾。

人間でいう二の腕あたりをただの一撃で叩き折り、マニピュレーターが保持していた巨大な二五四mmロウ・プレッシャー・ガン低圧砲ごとそれを後方へと吹き飛ばした。

『ランカーAC「雪風/重装改」を確認』

センサーが探知した各種の情報から判断された敵機のデータを元に、「ヴァイパー」の戦術コンピュータパイロットが操縦者に告げる。

トルーパーの口の端が軽く引き釣った。クサナギか。

厄介なヤツを送り込んでくれたものだ。

しかし！

トルーパーは、「雪風/重装改」を駆るレイヴンのことをよく知っていた。

ランカーレイヴン、「クサナギ」

歴戦の強者がそろそろランキング上位においてさえ、最も実戦経験に溢れたレイヴンとして一目置かれる存在。

その戦場での力量は、最上位ランカートップに匹敵するとまで噂されているほどだ。

仮にコイツを敵にしなくてはいけないのだとあらかじめ知らされていたならば、思わず逃げ出したくなるような相手だった。だが、

最初の一撃で奴の機体は大きな損傷を被っている。

今有利なのは明らかにこちらだ。

粒子加速砲による攻撃がもたらした衝撃から短時間で立ち直った「雪風／重装改」は、先ほどの弾薬庫への砲撃に使用したプラズマビーム砲を左背部のターレットポイントから惜しげもなく切り離れた。

続いて加速用の背部推進器を作動させ、「ヴァイパー」に向けて一直線に突撃を開始する。

白い巨人の背後の大気が莫大な推力発生に伴う熱量で陽炎のように揺らめく。

「雪風／重装改」の主兵装は、右腕部マニピュレータが保持していた二五四mm低圧砲だ。

低圧砲とは初速を犠牲に重量の軽減を図った砲システムのこと
で、通常の火砲と比較すると移動目標への命中率と射程距離で見劣りする傾向があった。

ただし、「雪風／重装改」が保持していた二五四mm低圧砲は、レイヤード第二の企業、「クレスト・インダストリアル社」が威信に賭けて開発した最新型であった。

それは、従来の低圧砲とは比較にならない初速でもって強力な成形炸薬弾HEAT-MPを発射する。

性能の向上と比例して大重量化してしまったが命中率と単発の打撃力との双方に優れ、総弾数こそ小数なものの兵器としてのバランスは極めて良好だ。

特に対AC戦闘を余り念頭に置いて組みあげられたとは言えない「ヴァイパー」のような機体にとって、その打撃力はかなりの脅威となるはずだった。

しかし、右腕を破壊されたことにより「雪風／重装改」は中距離近辺で「ヴァイパー」と打ち合える最も有効な火器を失ってしまったのだ。

それは詰まるところ、「雪風／重装改」が、取りうる戦闘の幅を

滅じられたことに他ならない。

逃げる気はない、か。

もちろんトルーパーにはわかっていた。

よそからの支援もなく敵中に孤立した「雪風/重装改」にとつて、ここからの離脱に成功するためには目前の障害を排除する必要がある。そして、そのためにはこちらの懐に飛び込むことで自機の装甲防御を生かした殴り合いに持ち込むのが最善の選択肢なのだと。

「舐めるな！」

「ヴァイパー」の双腕部に携帯された火砲が同時に咆哮した。

胴体背部から展開した自律攻撃装置も敵ACに向かって四〇m砲弾を投げ付けていく。

立て続けに放たれた二七mmと二五mm、そして四〇mm口径の焼夷徹甲弾が、豪雨のごとく「雪風/重装改」の機体表面に着弾した。

しかし、「雪風/重装改」は叩き付けられたそれらがまるで子供の投げる紙礫であるかのように突撃を止めない。

直後、「雪風/重装改」は右側背部と両肩に装備した誘導弾発射装置チャイから複数の誘導弾を一齐に投射した。

同時に稼動した自律攻撃装置も「ヴァイパー」に向けて砲弾を発射し始める。

「ヴァイパー」が搭載している物と同じ型の四〇mm機関砲だ。白煙をなびかせまっしぐらに飛来した誘導弾が、「ヴァイパー」の両肩とコア正面に装備された誘導弾迎撃装置を潜り抜け目標への接触と同時に信管を作動させて炸裂した。

衝撃が操縦席に収まるトルーパーを襲い、彼は一瞬敵機への視認を失った。

ただし、機体自体の損傷は致命的なものではない。

現在のACが採用するNM型特殊複合装甲は通常の材質複合装甲コンバインドアーマーとは異なり、装甲表面を形成する超微細機械ナノマシンが加えられた物理的衝

撃に対し自らの破壊をもつて瞬時に熱エネルギーへと変換、周囲に拡散することで装甲本体の貫通を阻止するという新世代の装甲だ。

例えるなら、旧世代の着弾反応装甲リアクティブアーマーが進化したものだと言えるかもしれない。

もちろんだが、熱量による破壊を主とするエネルギー兵器に対しても有効。着弾した熱エネルギーを自己破壊により周囲に拡散出来るためだ。

しかし、その刹那がトルーパーの隙を産んだ。それを見逃すことなく、「雪風/重装改」は「ヴァイパー」の内懐に向けて躍り込んでくる。

誘導弾の着弾がもたらした爆煙を掻き分けるように迫りくる敵機に向けて、トルーパーは粒子加速砲の砲口を向けた。

四〇mm機関砲 自律攻撃装置は敵機目掛けて攻撃を継続し、左腕部の二五mm機関砲も絶え間なく砲弾を吐き出し続けている。

この距離なら回避出来るはずがない。必中だ。

そう確信してトルーパーは引き金を引いた。トリガー

その瞬間、「雪風/重装改」の姿がモニターから消えた。

照準を失った光の帯があらぬ方向へと発射される。

「雪風/重装改」は、いやそれを操るクサナギという名のレイヴンは、明らかに規定外な行動イレギュラーを実施した。

加速用推進器の作動によって半ばホバリングに近い機動を行っている自機の重心を故意に側方へと動かしたのだ。

これによりバランスを崩した「雪風/重装改」は右側に倒れ込むように機体を流し、独楽のごとく旋回しながら「ヴァイパー」の左側面へと回り込んだ。

それは通常、ACの機動プログラムに存在しない動きだ。

しかし、手動による微妙な重心調整を行うのであれば、決して不可能な機動ではない。

「馬鹿な！」

予想に反した敵機の挙動にトルーパーは混乱した。

普段の彼ならば、こんな呪詛の言葉を口にして貴重な時間を浪費することなどあり得ない。

この瞬間が運命を分けた。

まるで、その混乱を見抜いたかのように「雪風／重装改」の左腕が薙ぎ上げられ、「ヴァイパー」の左腕部と粒子加速砲の砲身とが一撃の下に切断され宙に舞った。

クリプトンガス・レーザーブレード。

工業用のプラズマトーチ 物資切断に用いる高温のバーナーを接近戦用の兵器へと転用したものだ。

その破壊力は、NM型特殊複合装甲ですら易々と切り裂く。

青白い超高温のガスによって形成された刀身が「雪風／重装改」の左腕から伸び、ぱっさりと「ヴァイパー」の左腕と粒子加速砲の砲身を両断したのである。

それは、まるで自機が受けた仕打ちに対する報復のようであった。「耐久限界〈AP〉」、残り五〇パーセント。機体被害が増大しています」

無機質極まりない戦術コンピュータの声が、トルーパーの耳朵を打つ。

至近距離であるにもかかわらず次々と誘導弾と四〇mm焼夷徹甲弾とを投射しながら肉迫してくる「雪風／重装改」を前に、トルーパーは「ヴァイパー」を急速後退させた。

回避運動ではない。

任務を放棄、生き延びてふたたび機を凶るために戦場離脱を試みたのだ。

形勢は不利。

そして、自律攻撃装置は総弾数を撃ち切ってしまった。

この状況では重装甲の敵を仕留めることは難しい。

ただし、まだ逃げるだけの余裕はある そうトルーパーは判断したのだが遅かった。

「ヴァイパー」が持つ四本の脚部、そのうち左前脚部の関節が四〇mm砲弾の命中によって生じた損傷に耐え切れなくなり遂に駆動を停止した。

機体の平行を崩し瓦礫を背中から突き破るようにして無理矢理に敵との距離を置いた「ヴァイパー」目掛けて、「雪風／重装改」から放たれた誘導弾が飛来する。

回避出来ず、「ヴァイパー」は立て続けに複数の誘導弾を被弾した。

頭部は粉碎され、機体は廃墟を背に摺座した。

人と言えば胸板に当たるコアの正面装甲は被弾により醜く歪み、耐久限界を超える衝撃を受けた融合炉は緊急停止^{スクラム}。

融合炉からの電力供給が途絶えたことよって推進器は完全に沈黙し、まともな機動を行う手段すら失われた。

頭部にあるメインセンサーを破壊されたため機体各所の補助センサーを統合した精度の悪い画像が表示されるモニターの中に、片腕を持たぬ白い巨人の姿が映っていた。

保有弾数を撃ち切ったのか「雪風／重装改」は右側背部のターゲットポイントから誘導弾発射装置を切り離し、左下腕部に装備されたレーザーブレード発生装置を起動させた。

青白いプラズマガスの刃が伸びる。

ろくに動くことも出来ない「ヴァイパー」に止めを刺すつもりなのだろう。

背部推進器が生み出す推進力^{スラスト}に押し出され、「雪風／重装改」は「ヴァイパー」との距離を一気に詰める。

レイヴンだからな。

トルーパーは、目前の敵に思いを馳せていた。

恨み言はない。

ゆつくりと瞼を閉じ、次いで力強く見開くと同時に残された唯一の火器、右腕部の二七mm機関砲を乱射した。

が、二七mm^{そんなもの}徹甲弾など意にも介さず「雪風／重装改」は「ヴァ

イパー」に迫る。

もはや避けられぬ運命を目前にしたトルーパーの脳裏に愛するひとり娘の姿がよぎった。

済まない

クリプトンガス・レーザーブレードの閃光がモニター一杯に広がった瞬間、彼はその言葉を口にすることが出来た。

数万度のプラズマが彼の肉体を消失させるまでのわずかな時間、まるで神がささやかな慈悲を与えたかのように。

グリーン（１）

まったく、なんて格好をしているのだから。

眼前の同居人が見せている明け透けな姿を目の当たりにして、草薙蒼馬は思わず額に手をやった。

間を持たせるために、掛けている小さ目の眼鏡をくいと直す。

今まさに仕事から帰宅したばかりの蒼馬は黒色の頭髪こそ比較的ラフにしているものの、折り目の付いたスーツと高級そうなネクタイで身を固めた姿を見る限り行政機関に努める若手の官僚だと名乗っても違和感がない。

年は、少し若く見られることもあるらしいが三十路の半ばを越えていると聞く。

「何よ。文句でもある訳？」

悪びれもせずに同居人は言った。

若い女だ。

だが、少なくともその口振りから女性的な恥じらいの意志は見て取れない。

右手に持ったグラスから、これ見よがしに清涼飲料を口にする。

彼女の名はレジーナという。

おそらく本名ではない。

蒼馬が彼女と出会ったのは、昨年の今頃の話だ。

いや出会ったと言うのには語弊がある。

詳細に説明すると長くなるのであえて簡単に言えば、行き倒れに近かった野良猫を蒼馬が拾って来た、とさえ言えばどうか。

訳ありなことは明らかであった。

本来ならば管轄区の治安部署に届け出るところであるが、なぜそうしなかったのかは今となっては蒼馬自身ですらはっきりと覚えていない。

レジーナの見た目の年齢は、せいぜい取っても二〇代になったか

ならないか　ひよつとしたら一〇代の後半なのかもしれない。

出会ったその時は文字どおり薄汚れた浮浪者然としていた彼女だが、何か競技でもしていたかの様にシェイプアップされ均整の取れた肉体と美形とまでは言いかねるがそれなりに人好きのする容貌とが中々に魅力的な女性だ。

先ほど彼女を野良猫に例えたが、なるほどレジーナには“猫”のイメージがよく似合う。

ただ、蒼馬はいわゆる下心があつて彼女を自室に住まわせている訳では決していない。

もし彼にそう言う下卑た意志があつたのなら、とうの昔に彼女とことにおよんでいただろう。

例えレジーナがそれを望まなかつたとしてもだ。

男女の肉体的な力の差は、常に女性の意志を蹂躪し得る。

しかし、今のところふたりの間に男女の関係は存在していない。

蒼馬は、仕事柄郊外の集合住宅にある自室を留守にすることが多く、言わば自宅の管理者を無料で雇用した感覚でもって彼女との共同生活を営んでいるのだ。

共同生活と言う感覚すら希薄かもしれない。

どのような仕事に従事しているのか知らないが、蒼馬が自宅に戻るのは週に二、三日がせいぜいなから。

私が留守にしている間はこの部屋を好きに使ってくれて構いませんよ。

確かに蒼馬はレジーナにそう言った。

この部屋で暮らす実質的な時間も、今となつては彼女の方が断然多いことも事実だ。

だから、レジーナがここを“自宅”と思つて生活する事にも異論はないし、むしろ好ましくさえ思う。

だが、それにしたつて限度というものがある。

若い女性が成人男性と同居しているひとつ屋根の下、素肌の上に男物のシャツ一枚を羽織つて闊歩している状況はいかなものか。

しかも、上半身にはアンダーウェアすら着用していない。

普通の男であれば自分を誘っているのかと誤解しかねないだろう。自身にそれだけの性的魅力セクスイーブルがないと考えているのか、それとも自分を“オトコ”として認識してくれていないのか。

どちらにしても飛んだ考え違いだ　と蒼馬は思う。

「レジーナさん。一応私も男なのですから」

遂に耐え切れなくなって蒼馬は告げた。

「もう少し私の視線を気にした格好をしていただけませんか？」

「帰宅するタイミングが悪い！」

間髪入れずにレジーナは反論した。

「ちょうどお風呂からあがったところだったのよ。いいもの見られて、よかったでしょ？」

からかうように、わざとらしくしなを作る彼女。

なるほど、言われて見れば短目で癖の強いレジーナの麻色の髪はしつとりと水気を帯びている。

普段掛けている大き目の眼鏡も外したままだ。

そうですか、お風呂あがりですか。それならば、まあ仕方ありませんね　なんて訳はないでしょう？

蒼馬は大きいため息をついた。

これ以上本件で話をして無駄だと悟り、蒼馬はキッチンへと向かい食事の準備を始める。

食材は既にまとめ買いしており、その中から必要なものを選択して合理的に使用するのが蒼馬流の調理哲学だった。

同居人であるレジーナが家事全般に対して蒼馬の仕事を手伝うことはまったくたくない。

なお彼女の名誉のために付け加えておくと、能力的に出来ないという訳ではないのだ。

どんな理由なのかはわからない　おそらく性格的なものなのだろう　が、蒼馬は自室に他人を同居させることに寛容ではあっても、その内部に手を入れられることを極端に嫌った。

最初の頃、せめてそれ位はとレジーナが室内の清掃を始めようとする、蒼馬は強い口調でそれを制したのだ。

あなたは何もしくてよろしい、と。

彼が声を荒げたことは、それ以降一度もない。

だからこそ、レジーナの記憶にその光景は鮮明に焼き付いていた。

特に彼が書斎として使用している一部屋については、彼女が足を踏み入れることさえ許さなかった。

そこには、蒼馬が使用している個人端末機が鎮座している。

「管理者」によって文字どおり社会のほとんどが管理されている地下社会では、携帯用の小型端末と並んでまともな経済活動を行うために必須の設備だ。

もちろんその端末にアクセスするためには個人IDが必要であり、登録された当人以外の者が勝手にそれを使用することなどまず不可能だった。

にもかかわらず、蒼馬は書斎に複数のパスワードを必要とする電子錠ユリディを追加して設置し、他者の侵入に対し異常なまでの警戒感をあらわにしていた。

露骨でさえある、とレジーナは思う。

何か知られたくない秘密でもあるのだろうか。

仕事の関係でそういった情報を取り扱っているのかもしれない。そう言えば、「決して中をのぞいてはいけませんよ」とされた箱や部屋を好奇心から確認してしまい、その結果主人公が破滅してしまつという昔語りが結構あつたっけ。

ふと、そんなことを彼女は思い付いた。

不思議なことに好奇心を満足させた結果が主人公を幸福に導くと言う物語には、ついで出会ったことがないな、とも。

もつとも今の自分にはそれだけの権利はないけどね、と自分自身を納得させてはいる。

生活の場所どころか文字どおり食事や衣類の面倒

通常端末を

使用出来ないレジーナは、今のところ草薙蒼馬の被扶養者として「管理者」に“認識”されている。までも見てもらっているのだ。普通に考えればあり得ない話である。

衣食住の引き替えになんらかの“見返り”を要求されるか、それとも治安部署に突き出されるか、あるいは犯罪に巻き込まれて悲惨な境遇に堕ちるかが、あの時の自分の予想し得る未来であったのだから。確かにあの時はそれを認識した上でなお、見知らぬ男性の誘いに乗らねばならないほど追い詰められていたのだ。

それから比べれば、この境遇は天国。もちろん、そんなものが本当にあればの話だが。にさえ近い。少なくとも、自分にはそう思う義務がある。

例え蒼馬の側に自分を困ういかなる理由が存在していても、だ。やがて蒼馬の手料理が運ばれてきた。

遺伝子操作された産卵鳥が文字どおり生み出した卵と、繁殖力を買われてレイヤードに普及したと伝えられている大型食用鼠の肉を使用したオムレツだ。

人類が地下に移住する以前から食べられていた料理であるとされてはいるが、その頃の人類の生活に関する情報は「管理者」を通じてアクセスするデータベースにも不確実な文献でしか掲載されていない。

「蒼馬、ちょっと相談があるんだけど」

蒼馬と向かい合って食卓に着いたレジーナは、軽い乗りでとんでもない話題を切り出した。

「あたし、傭兵レイヴンになろうと思うの」
突然死刑を言い渡された無実の民のような表情を見せて固まってしまう蒼馬。

話の脈絡がまったく見えず、どう反応したらいいのかわからないのだ。

そんな彼の態度を尻目に、レジーナは自分のペースで話を続けた。このままいつまでもあなたの居候になっている訳にはいかないし、

だからと言ってまともな身分じゃない　蒼馬はそんな風に扱って
くれないけど　自分が働ける職場なんてたかが知れている。

これから自分の力で生きていくためにはやっぱりお金がいるし、
短時間で大きなお金を稼ぐにはそれなりのリスクを背負うのは仕方
がない。

「言いたいことはわかります。ですが」

漸く自分自身を取り戻した蒼馬が、諭すように言った。

「傭兵になるなんて話が飛躍し過ぎていると思いませんか？」

「きちんと計算はしているよ」

食事を進めながら彼女は答えた。

「適性試験をクリア出来れば、三週間の訓練所での基礎訓練で『
グローバル・コーテックス』社にレイヴンとして登録されるんだ。

その間に掛かった費用はレイヴンになってから返済すればいいのだ
から実質的にタダ。蒼馬には負担を掛けずに済むんだよ」

“レイヴン”とは、アー^Aマード^Cコアと呼ばれる強力な機動兵器に
搭乗し多大な報酬と引き替えに依頼されたさまざまな任務を解決す
る傭兵たちの通称だ。

その名の由来は、古来より不吉な予兆、身に降りかかる死の前
触れとされた　もちろん科学的な根拠がある訳ではない　“渡
り鴉”から来ているという。

彼らの出現は、明らかな平穩の破壊であるのだという意味で。

当然だが、社会秩序を維持するためにもそうつた強大な武力を
個人単体に保有させることは好ましくない。

そこで「管理者」は、レイヴンたちに一定の“縛り”を設けるこ
ととしたのだ。

それが「グローバル・コーテックス」社である。

この会社は基本的にはレイヤードの住民に娯楽を与えることを目
的として設立された企業体であり、その一部門として専門技術者や
労働者を必要に応じて現場へと派遣する人材バンクとしてのノウハ
ウを深く有していた。

これに目を付けた「管理者」は、「グローバル・コーテックス」社に対してレイヴンたちの管理登録を行うシステムの構築と運用を指示したのだ。

企業体としての発言力に限界を感じていた「グローバル・コーテックス」社は、降つて湧いたような「管理者」からの指示に驚きつつも凄まじい熱意をもってこれに応えた。

彼らは自社の一部門として傭兵派遣組織「レイヴンズ・アーク」を設立し、「管理者」が認めACへの搭乗を許可したレイヴンたちをほぼ完全にその傘下へ治めたのだった。

「レイヴンズ・アーク」に登録されたレイヴンには、「グローバル・コーテックス」社を通じてのみ“正式な”依頼がやってくる。言うなれば、依頼主は「グローバル・コーテックス社」を通さない限りレイヴンを雇用することが出来ないシステムになっているのだった。

レイヴンへの道は、広く門戸が開かれている。いかなる社会的地位を持つ者 例えそれが指名手配中の凶悪犯罪者であっても、「グローバル・コーテックス」社が認定する能力的基準をクリアすれば、レジーナが言ったとおり訓練所での基礎訓練を経た後、分け隔てなく「レイヴンズ・アーク」に傭兵として登録される。

ただし自機となるアーマード・コアの管理自体を「レイヴンズ・アーク」が行うため、言うまでもなくレイヴンがACの個人的な運用を行うことは出来なくなっていた。

まれに、個人的な感情を満たすため不必要な暴力行為を働く愚者は出現するが、そういった場合、彼又は彼女には「グローバル・コーテックス」社から派遣された他のレイヴンによって肅正される運命が待っている。

とは言え、破格の収入が得られるという割にその敷居は余りにも低い。

レイヴンを目指す者が後を絶たないのは当然だった。

それでいて巷にレイヴンが溢れているような状況にならないのは、やはり彼らの死傷率が相当なものになるからだ。

確かにアーマード・コアは他の機動兵器と比較して比類ない戦闘実力を有している。

であるからこそ、レイヴンに襲撃されそうな組織は対抗として優秀なレイヴンを雇う。

そして、「グローバル・コーテックス」社は配下のレイヴンたちがお互いに交戦することを忌避しない。

代わりなどいくらでもいるからだっただ。

「私の懐を考えてくれるのは嬉しいのですが」

多分説得は無理だろうと半ば諦めながら、蒼馬は言った。

「私があなただをここに置いているのは、言わば私の道楽のようなものですし、あなたが恩義を感じる必要はないのですよ」

「借りは返す。施しを受けるのは嫌なの」

レジーナは断言した。

言葉の端々に会話を打ち切る意志がうかがえた。

蒼馬もそれ以上は何も言わなかった。

レジーナが蒼馬に求めたことは自分自身の身元の確認だった。

草薙蒼馬の名において、レジーナという一個人　あくまでも戸籍上の住人と言う意味ではない。「グローバル・コーテックス」社はそんなものは求めない　が“実在する”と保証しろ、と言うことだ。

保証は文書を提出することにより行われ、事務的には極めて単純なものだった。

同居人の自由意志を蔑ろにする権利は蒼馬にない。

内心の方向がどちら側なのかは明確だった。

しかし、蒼馬はあえてその感情を封印した。

レジーナが感謝の気持ちをお口に作る。

翌日、レジーナは適性試験を受ける日が二日後であることを蒼馬に告げた。

急な話とは思えなかった。

「レイヴンズ・アーク」は、常に人材を募集し続けている。傭兵の業務にシーズンというものは存在しないのだ。

適性試験は比較的簡単なものであったようだ。

主として精神的・肉体的な適正と必要十分な知性　流石に“馬鹿”では複雑な操縦機構を持つA/Cを操作出来ない　がある限り、問題なく次の段階へと移行出来た。

衆を越える能力を求められたりはしなかった。

急激な環境の変化に適応出来ない者たちがふるいに掛けられたのだと言っている。

特に感情面で不安定だと判断された者は、ひとり残らず不合格とされた。

適性試験が終われば、全寮制の研修所で三週間の訓練が科せられる。

だが、そこはまさに計算された“監獄”と呼んでよかった。

生活自体に不自由はない。

むしろ、許容される範囲である限りそこには規則ルルと言うものが存在せず、訓練生には必要以上の“自由”フリーハンドが与えられた。

訓練でさえ決められたカリキュラムに参加を強制される訳でなく、電子的なシミュレーションを各自の判断で行うことだけに終始された。

絶対に許されなかったのは、他の訓練生と直接の交流を図ることだった。

訓練所には数十人の訓練生がいるはずだったが、そのすべてが単独で訓練を受け　いや訓練に“従事”していた。

訓練生は、常に孤独を強いられた。

すべてを自分で考え、判断し、時には学習して決断することを要求された。

“監獄”と言うのは、まさに言い得て妙であった。

精神を打ちのめされ、退所を申し出る者も出たと言う。

レジーナは、その環境に耐えた。
適応は出来なかった。

しかし、孤独に対してそれなりの耐性を有していた彼女は、中盤以降その孤独すらを半ば他人ごとのように考えて日々を過ごした。彼女が孤独から解放され、蒼馬が待つ“自宅”へ帰還したのは、認定試験が行われる前日のことだった。

それは、残った人間に最後の決断をさせるため「グローバル・コーテックス」社が与えた“情”^{なまけ}だったのかもしれない。

三週間ぶりに居候への再会を果たした草薙蒼馬は、最初に深々と、そう本当に深々とため息をついた。

まさか本当にここまでやるとは、と呆れ果てたかのような表情と共に。

そんな彼と対照的に、レジーナは実に晴れ晴れとした笑顔で蒼馬と対した。

これで居候とはおさらばね。

よかったら、今までのお礼に養ってあげてもよくってよ。

からかい半分本気半分で、レジーナは言う。

確かに、レイブンがひとつの依頼で得る報酬は普通の勤め人の年収にさえ匹敵するから、彼女の発言に金銭的裏付けがない訳ではない。

「私にも自尊心はありますから、ヒモになる気はありませんよ」「蒼馬がそう返したのも、彼からすれば冗談のひとつであったのだろっ。

とてもそうは思えなかったとしても、だ。

レイヴンになるための最後の関門、認定試験は実際の“任務”^{ミッション}を果たすことで行われる。

もちろん新人がこなせるレベルの依頼であるから、既に現役で活躍しているレイヴンにとっては比較的容易い難易度のものが選ばれている。

機体こそ「レイヴンズ・アーク」が支給する「基礎機体」^{ベーシック}と呼ば

れる低性能　とは言っても、並の戦闘用MTごときでは相手にならない実力を持つ　なACであるが、依頼を受けるといふ立場を得た以上、レジーナは既にレイヴンの仲間入りを果たしていると言っているのかもしれない。

そのためか、「レイヴンズ・アーク」は彼女に個人用の端末機を与えた。

「レイヴンズ・アーク」の専用回線イントラネットにもアクセス出来る特殊な端末だ。

レイヴンは、この端末を介して「グローバル・コーテックス」社が幹旋する任務への参加を表明する。

乗機となるACと共にこの端末を保有することこそが、正式にレイヴンとなった証だと言えるのかもしれない。

レジーナは、蒼馬に一部屋を空けてもらってそこに端末を配した。回線を繋げ基本的なセットアップを行う作業は、「グローバル・コーテックス」社から派遣された専門の作業員が行った。

その間、本来の世帯主である筈の蒼馬は作業員たちの手によって丁寧ながら半強制的に己の住居から追い出される羽目となった。

彼が自宅の玄関を潜るのは、それから四時間後。

時間帯としては、夕方をとくに越えて夕食時になっていた。

食事は外食となった。

いつもなら自分で食事を作る蒼馬が、すっかりその気を失っていたからだった。

「あたしがレイヴンになるの、そんなに嫌だった？」

レストランでの食事の最中、レジーナは小声で問うた。

「好き嫌いではありません。“反対”なんです」

やはり小声で蒼馬は答えた。

「あなたには、覚悟が見られませんから」

「覚悟？」

蒼馬に言われて、きょとんとした表情を見せるレジーナ。

「覚悟って、何よ？」

「今にわかると思います。わからなければ、それまでですし」
彼の言った“覚悟”の意味がわかるのは、認定試験が始まって
すぐのことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5396z/>

ArmorCore 三つの問い~ザ・スリー・クエスチョンズ~

2011年12月19日00時48分発行